

ベルリンの壁の珍事

本年 11 月9日、ベルリンの壁が崩壊してちょうど四半世紀を迎えた。あの時ベルリン市民がレンガの壁によじ登り、ハンマーでたたき壊していた光景は瞬く間に全世界に伝えられ、まもなく東西の対立は解消され、旧東欧諸国は民主国家へ変貌して行った。マルクス、レーニン神話の放擲と社会主義体制の崩壊である。爾来あの衝撃的なシーンが脳裏から消えることはない。

初めてその壁を訪れたのは、中国の毛沢東主席が亡くなった直後の 1976 年9月だった。事前に西独人ガイドから言い含められていた注意事項を念頭に緊張感を抱きながら、西ベルリンの国境へやって来た。ずかずかと乗り込んできた強面の東ドイツ兵に「降りろ！」と乱暴にバスから追い出され、検問所チャーリー・ポイントの小さな建物へ入った。パスポートを提示して「国境線」を跨いで社会主義国家・東ドイツへ入国した。彼らがバスのシャシーの下部に大きなミラーを差し入れて、隠匿密輸品をチェックしていたのをぴりぴりするような緊張感で見守っていたことを思い出す。

そしてその十数年後、国会議員の海外視察団の渡航手続きをお世話した時のことである。西ベルリンから東へ入国しようとした一行が、突然検問所で踵を返してしまった事件があった。東側で待機していた東ベルリンの日本大使館員は呆気にとられ、慌てて外務省へ至急便を打電した。私は衆議院事務局に呼びつけられ、議員団が取得したビザに不備があったのではないかと詰問された。真相は一行が帰国して明らかになった。ビザ取得にはまったく落度がなく、あるまいことかひとりの我儘な大先生が東独係官のしつこい質問と長い待機時間にしびれを切らし、日本の代表団に失礼だと怒って、突然東独行きは止めると強引に引き返してしまったことが原因と聞かされた。

壁崩壊とは打って変わって静かな 25 周年行事を想うと、緊張した臨場感とあの馬鹿げたパフォーマンスの忌々しい記憶が甦ってくる。対立の象徴だった壁の大半は今や姿を消し、ドイツは一つの統一国家に立ち戻った。だが、祝福する気持ちの反面、一抹の寂寥感を憶えるのは何ゆえだろうか。